

修了式 校長講話要旨

○春到来

温暖化の影響なのか、日本列島各地で桜の開花宣言がされました。かつては関東地方では、桜の開花は3月末か、4月のはじめで、新学期始業式や、入学式に桜が満開になるのが定番でしたが、そうもいけなくなりました。そして、今年の夏も猛暑の予測です。地球環境のことについては後でまた考えたいと思います。

○1年を振り返って

今日は今年度2025年度の修了式です。今年度の学校全体としての教育活動は一区切りということになります。さて、この1年間の成果は、皆さんはどうだったでしょうか？

中学1年生は、HR合宿から始まってようやく本校の生活にも慣れてきたところでしょう。2年生は直前にセブ島の地震や豪雨があり実施が危ぶまれましたが、フィリピンの語学研修では、貴重な経験をすることができました。

高校1年生は、HR合宿やスポーツフェスティバル、創造祭などを通じて、大規模な本校の生活に慣れ、交友関係を広げることができたでしょう。一貫コースは京都での伝統文化研修がありました。

2年生はコースごとに取り組が違いました。夏にはグローバルコースがオーストラリア、アデレードでの2週間のホームステイ、12月に特進コースはオーストラリア、シドニーでの大学寮での研修、一貫コースはシンガポールの大学での研修をおこないました。3月には進学コースが初めてのベトナムと九州の修学旅行、スポーツサイエンスコースも九州での修学旅行でした。それぞれのコースの特性に合わせた宿泊体験を行うことができ、経験と見聞を広めることができました。この経験をそれぞれ皆さんが学び取って成長してほしいと願っています。

○卒業式の式辞から

春は旅立ち、新たな出発の時です。2日に高校の卒業式を行い581人が卒業していきました。また、昨日(18日)、62人の中学校の卒業式を行いました。このまま本校の高等学校課程に進む人が大半ですが、何人かは他の高校へ進学する人がいますので、昨日でお別れになりました。

2日の高校の卒業式の式辞では、

近年の温暖化に伴う様々な気候変動への対応、SDGs、地球環境への配慮に加えて、国際紛争への対応等々、これからの国際社会、地球全体を考えていかなければならない課題は山積しています。特に地球温暖化の進行に伴い、冬季オリンピックを開催できる環境は減少して将来的には、開催可能地は46都市まで減少するとの予測があり、開催そのものが危ういとの極めて厳しい予測もあります。これらの課題解決のためには、自国の利益や都合を優先することではなく、また、感情的な対立でもなく、冷静な態度で互いの立場を尊重して歩み寄ること、協調が必要です。

国際的な視野で物事を考えてほしいと思います。アメリカ・イスラエルによるイランへの軍事行動と、そしてイランの応戦は決して「対岸の火事」、「遠い国の戦争」ではなく、石油が届かなくなり、ガソリン等が値上がりするなど私たちの日常生活にも大きな影響をもたらしています。この後の国際情勢が私たちの生活にどのような影響が出てくるのかまだまだ見通しがつきません。

○地球環境について考える

今から23年前の平成15（2003）年版の「環境白書」では、「環境には国境線はなく、一地域の環境負荷は地球大に広がっていく一方で、どの地域も地球生態系の一部であるため、地球環境が悪化すればその影響はなんらかの形で地域の環境にも変化を及ぼします。また、地域の環境が無数につながり、相互に依存、影響しあって地球環境が構成されていることを考えると、地域段階における取組は地球環境問題への対応の基礎となります。このように、地域の環境と地球環境とは密接な関係を有しており、「地球規模で考え、地域で行動する（Think globally, Act locally.）」、あるいは、「地域で考え、地球規模で行動する（Think locally, Act globally.）」という言葉に表されるように、両方を一連の問題としてとらえ、取り組んでいくことが重要となっています。

一人ひとりの日常生活の中での積極的な取組が重要となっている今日、私たちが自らの生活と環境との関わり合いについて認識を深めつつ、足元から取組を進める上で、身近な地域は環境保全への取組の絶好の場と考えられています。」とされています。

このため、私たち一人ひとりが、環境について、まず生活の場である地域社会の中で考え、具体的な行動を起こしていくこと、すなわち地域の視点に立って環境問題に取り組んでいくことが大切です。

本校のSDGs Labでは、「地域の未利用資源を活用した循環型大豆生産モデルの確立と持続可能な未来社会の創造」を主題に様々な活動を行っています。今回その取組が茨城県の「茨城ドリームパス」に2度目の挑戦でグランプリ・優勝を勝ち取り、大井川県知事と面会することになりました。3月11日の茨城新聞でこのことが記事で紹介されました。

具体的には牛久シャトーに代表されるように、牛久は日本のワイン製造発祥の地の1つです。ワイン醸造の過程で大量に発生するブドウの搾りかす（通称ワインパミス）は産業廃棄物として、処分されていますが、このワインパミスを堆肥化して、大豆を栽培して、さらに大豆ミートをつくること、さらにこの大豆ミートから代替うな井を作りました。牛久は「うな井発祥の地」とも呼ばれているので、牛久由来のものから牛久の名産を作り出すという試みで、専門学校や食品会社など多くの関係機関とも連携した研究を進めてきました。「地球規模で考え、地域で行動する（Think globally, Act locally.）」実践ということになり、正に地に足がついた取組が成果を上げたということになるでしょう。日常からの疑問や、その疑問を解決するため方法を考えること、自分自身のアンテナを張り巡らして、地球のことを考えて自らの行動を考えることをしましょう。

○来年度への展望です

学祖井上円了先生は、「哲学は知りたいという気持ちであり、それを究めていくことが真理に至ることであり、哲学は結論ではなく出発点である」とされました。皆さん自身が「なぜ、なぜ、なぜ」を追究して、「考える中学生・高校生」となり、自ら課題を解決していくことが必要です。そのために私たち教師の役割は皆さんの「思考の水路」、「考える道筋」をつくること・支援することだと考えています。春休みに1つでいいですから疑問を持ち、インターネットなどを活用しても、それだけに終わらずに、自分で考える習慣を作ってください。